

## 「自分で考える」

ブルース・L・バートン

2000.3.1 放送

多くの皆さんと同様、私も毎朝、朝食をとりながらテレビを見たり新聞を読んだりしています。新聞は、一応すべての面に目を通すようにしていますが、特に必ず見るのは、第一面の一番下に掲載されている出版社の広告です。もとより私自身が読書好きだということもあって、そこに目が行くのですが、それよりは大学の教員である以上、どんな本が出ているのか常に知っておいたほうが良いと思い、見るようにしています。

広告を見ていつも思うのは、まともな本もあれば、そうでないものもたくさんあるということです。例えば、私の専門である日本史関係の本で、タイトルからして、間違った歴史認識に基づいて書かれたのではないかと思われる本も、よく見受けられます。

専門外でも広告を見て不審に思う本がたくさんあります。特に気になるのは、医学の本で、特定の薬または治療法さえ使えば、どんな厄介な病気でも必ず治ると、読者にアピールしているようなものです。また、金融関係の本で、楽して億万長者になれる方法を教えるという類いのものも同じ意味で気になります。もし健康や財産の管理がそこまで簡単なことであれば、世の中の人々は皆元気で金持ちになっているはずですが、実際はそうではないので、こうした本の主張を少し疑いたくなります。

視聴者の方の中には、私が言っていることは単なる偏見にすぎず、こうした本も信頼性が高く、非常に役に立つものだと思っている方もいるかもしれません。確かに、医学や金融は私の専門外なので、あるいは誤解しているところがあるのかもしれません。しかしながら、一般論として、本のなかにはいいものと悪いもの、信頼できるものとできないものがあるということについては、皆さんも異論はないと思います。

だとすれば、少なくともノンフィクションに関して言えば、本を読むときは注意しないと騙されることがある、ということになります。著者の主張を鵜呑みにせず、常に自分自信の経験や知識と照らしあわせながら読むことが大切です。

このようなことを言うと、当たり前なことではないかと思われる方が多いと思いますが、しかしここで敢えてこのような話をするのは、少なくとも近ごろの大学生を見る限り、こういった姿勢で文章を批判的に読む人が意外と少ないからです。私は授業で数年前から大学生に本を読ませて感想文や書評を書かせることにしています。課題を出すときは、いつも次のような注文をつけます。「単なる要約ではなく、必ず本の内容を自分なりに批判してください。著者の言っていることは正しいと思うのか。読んでどんなことを考えさせられたのか。総じて本をどのように評価するのかを書きなさい」と。こうした具体的な指示を出したにもかかわらず、大多数の学生はこれを無視して、内容の要約だけを書いてきます。それも自分の言葉ではなく本からの引用を切り貼りしているにすぎないことが多いのです。中には自分の考えを書く学生もいますが、その場合でも普通、最後の数行で「私はこの本

を読んで大変勉強になりました。これからこのテーマについてもっと勉強したいと思えます」というような決まり文句を並べる程度で、あまり意味のある意見は見受けられません。

では、なぜこのような情けない結果になってしまうのでしょうか。学生は私の指示を理解できないのか。それとも本をきちんと読むことができないのか。読んだことについて考える能力が足りないのか。表現力の問題なのか。それとも単にやる気がないのか。おそらくこれら全ての要素が入っているのだらうと思います。しかし諸悪の根源は、ずばり言って学生たちに物事を批判的に考える習慣がないということだと思えます。

この問題は実は本の感想文に限らず、学生のすべての言動にも見受けられます。たとえば期末の試験において、学生たちは教科書で読んだことや講義で聞いたことを、そのまま答えることはできますが、自らの考えを論理的に展開することはあまりできません。また、授業中でディスカッションをするときも、学生は「私はこう思います」と自分の意見をはっきり言うことはありますが、なぜそう思うのかと聞かれたとき、根拠を挙げて論理的に説明できるとは限りません。

こうした学生たちを見て私がいつも感じるのは、小さいころから受けてきた教育のツケが今回ってきている、ということです。小学校以来、知識を詰め込むだけの教育を受けてきて、覚えるのではなくて自分で考えろと言われたことのない人たちは、大学に入ったり、あるいは社会人となった時、自分の考えを上手にまとめることができないのです。自分の頭で物事を考え、人を納得させるべく説明できるようになるためには、長い練習が必要だからです。こういったことは、小さいころから繰り返し自分の考えをまとめ、文章にしたり、人前で発表したり討論したりすることによって少しずつ上達していきます。しかし日本の学校はこうした練習をする機会を生徒や学生たちにどれだけ与えているのでしょうか。ほとんど与えていないように思われます。それは、21世紀を背負うっていく若い世代に、物事を考える能力が付かなくてもかまわないと言っているようなものではないでしょうか。

情報化社会という言葉はこの10数年よく耳にしますが、今日の社会において我々は、朝から晩まで絶えず押し寄せてくる情報の波を浴び続けています。こうした状況の中で要求されるのは、単に情報や知識を暗記する力ではなく、溢れる情報の中から本当に重要なもの、信頼できるものを正確に見分けて、自分自身で付加価値をつけた上で、実生活の中に活かせる能力です。学校教育の中で、若者たちがこういった思考能力や判断力を身につけなければ、日本の未来はどうなっていくのでしょうか。

周知の通り、最近日本の教育制度のありかたをめぐってさまざまな議論がなされていますが、そこでは、学生たちが覚えなければならない教育内容を減らすべきだという意見が最近多いように思います。例えば現在の義務教育を将来的に週三日程度まで減らして、余った時間を補習やスポーツに充てるべきだという大胆な提案が今年の1月に総理大臣の諮問機関から出ました。詰め込み教育がよくないから減らしましょう、という意味であれば、私も大いに賛成ですが、教育そのものを軽視した提言であれば、強い抵抗を覚えます。21世紀は、知識を詰め込む教育から自ら考える力を養う教育へと変えていく必要があると思

いますが、教育そのものの必要性に変わりはありません。現行のカリキュラムを減らすのは結構なことかもしれませんが、その代わりに討論やディスカッションなど、学生たちが自分で物事を考えて表現する機会を大幅に増やさなければ、21世紀の日本をしっかりと見据えた教育改革にはならないと、私は思います。

それでは。